

令和7年度第1回仙台市廃棄物対策審議会 議事録

日 時 令和7年6月6日（金） 14:00～16:00

場 所 江陽グランドホテル 3階「孔雀の間」

出席委員 齋藤優子会長、遠藤智栄副会長、伊藤美穂委員、猪股孝之委員、大原敦子委員、齋藤和平委員、阪野雅之委員、佐藤由麻委員、志田原美保委員、高橋たくみ委員、中島尚子委員（代理出席）、沼沢しんや委員、沼田隆委員、山田政彦委員、吉田美緒委員
以上15名（委員定数20名）

欠席委員 佐藤進次委員、佐藤渉委員、多田千佳委員、福島康裕委員、北條俊昌委員

事務局 環境局長、脱炭素都市推進担当局長、環境局次長、環境部長、脱炭素都市推進部長、資源循環部長、施設部長、総務課長、環境共生課長、資源循環企画課長、家庭ごみ減量課長、施設課長、今泉工場再整備担当課長

傍聴人 1名

- 次 第
- 1 開 会
 - 2 諮 問
「仙台市一般廃棄物処理基本計画」の改定について
 - 3 議 事
 - （1）仙台市一般廃棄物処理基本計画の中間評価について
 - （2）仙台市一般廃棄物処理基本計画の中間見直しの方向性について
 - （3）令和7年度の主な取り組みについて
 - 4 報 告
 - （1）今泉工場建替に伴う環境学習・啓発拠点の検討について
 - 5 その他
 - 6 閉 会

1 諮問

仙台市一般廃棄物処理基本計画の改定について、市長（環境局長）より仙台市廃棄物対策審議会（齋藤優子会長）へ諮問を行った。

2 議事要旨

発言者	議事要旨
齋藤会長	議事（１）仙台市一般廃棄物処理基本計画の中間評価について、事務局より説明をお願いします。
資源循環企画課長	<資料１-１・１-２に基づき説明>
齋藤優子会長	ただいまの事務局の説明について、質問や意見を承りたいと思う。
佐藤由麻委員	資料１-２の４ページ、家庭ごみに占める資源物の割合について、紙類やプラスチックは令和５年度には混入割合が下がったものの、令和６年度は再び増加している。この原因について分析していることがあれば教えてほしい。
資源循環企画課長	令和５年度にプラスチックの一括回収を開始し、大々的にキャンペーン等を行ったことなどにより、プラスチックの分別に対する意識が高まったと考えられる。しかし、令和６年度はキャンペーンの効果が続かず、混入割合が増加してしまったのではないかと考える。同様に、紙類についても、令和５年度にビニール袋に入れても排出できるようルールを見直しており、周知啓発を行ったことで、混入割合が減ったものの、令和６年度にはこの効果が続かなかったものと考えている。計画後半期においては、重点的に力を入れていく必要があると考えている。
藤田環境省東北地方環境事務所次長 （中島委員代理）	資料１-２の中で、一部遅れていると評価した項目が２つあり、これは一言でいうと分別ができていないということかと思う。全国の自治体でも同様の悩みがあり、福島市では条例を改正し、開封調査を実施して改善勧告を出しても違反が繰り返される場合は氏名等を公表するという取り組みを行っている。そのほか、政令市を中心に５つほどの自治体で同様の取り組みを行っているところがあるので、そういった先行事例を調査して、仙台市でも効果が見込めそうかどうか検討するという方法もあるかと思う。
資源循環企画課長	袋を開けて中身を確認するとなると様々な課題があるかと思うが、市民の皆様の分別意識の向上につながる手段について、いただいたご意見を踏まえながら検討していきたい。

齋藤和平委員	資料1-2の11ページ、食品ロスについて、懇談会などでは料理が手つかずになってしまうことがある。3010運動などもあるが、特に仙台市職員が参加する会食等においては、まずは席を立たずに料理を食べて、会の終わりの10分でまた確実に食べるということを宣言してもらいたいと思う。飲食店や宿泊施設等と連携とはあるが、飲食店側からすると、お金を払っているお客様に対して言うことは難しいと思う。見本として、仙台市職員が出席する会食等では、料理を食べる時間を設けるということを宣言して、そうすれば主催者側も出席者側も食事ができ、とても良いことだと思う。ぜひ実践してもらえるとありがたい。
環境局長	いただいたお話はその通りだと思うので、改めて市役所を含めて徹底していきたいと思う。また、国でも料理の持ち帰りのガイドラインの運用を始めているので、飲食店と組んで、持ち帰りができるような取り組みを進めていきたいと思っている。
阪野委員	食品ロスに関連して、社会学級という学びの中で、小学校の給食を試食することがあるが、私の子どもたちが学校に通っていた頃は、かなり給食が残っており、また、昔のように持ち帰ることはできないことになっていて、すべて廃棄されていたと思う。今現在はどのような状況なのか、また、このことが結果の中にどのように表れているのかお聞きしたい。
資源循環企画課長	給食に関しては、自分が食べきれない量を盛って、食べきるという達成感を持たせる食育が行われていると聞いている。そうすると、食べ残しが生じてしまうが、給食の食べ残し等は市内の民間食品リサイクル施設で製造される堆肥の原料となっており、その堆肥が学校や町内会の花壇等で使用されている。このように、給食の食べ残しも教育に活用されるような取り組みを環境局と教育局とで連携して行っている。また、この点については、今後、実績に関する記載の方法等を検討したい。
大原委員	資料1-2の10ページ、フードドライブ事業について、令和4年度をピークに収集量等が下がってきているが、原因等を伺いたい。
家庭ごみ減量課長	収集量の減少については、物価高騰の影響で、各家庭において多めに買わないなど節約したことの影響が大きいのではないかと考えているところである。
大原委員	速報値でいうと食品ロスの割合は令和4年度から令和6年度にかけて若干上がってきている。フードドライブは非常に重要な事業であると実感しており、収集量等を伸ばしていく工夫なども盛り込んでもらいたい。賞味期限切れ1か月前の食品に限るという部分が足かせになっていたり、家か

	ら食品を運ぶのが重くて大変であるということもあるが、食品を買えない人たちに分けていくという流れを作るということは、仙台市としても力を入れていい事業だと思っている。
高橋たくみ委員	食品ロスについて、宴会が始まって 30 分と、お開き前の 10 分間は席に座って食事を食べるという 3010 運動について仙台市でも取り組んでいると思うが記載されていないのはどういうことか。また、給食の食べ残し等を堆肥にしているという話に関して、堆肥化センターは閉鎖されているが、どのような対応になっているのか聞きたい。
家庭ごみ減量課長	3010 運動については資料 3 のスライド 5 に記載している。特に年末年始など外食が多くなる機会を捉えて、飲食店やホテルと連携しながら食べきりキャンペーンを実施している。
資源循環企画課長	堆肥化センターは平成 14 年 3 月に富谷市石積に設置していたが、老朽化が進んだことと、市内、県内で民間リサイクル施設が整ったことから、令和 6 年 1 月に廃止したものである。堆肥化センターでは給食生ごみに加え、剪定枝、し尿汚泥の 3 つを搬入し、加工、処理して堆肥化していた。そのうち、生ごみと剪定枝は市内の民間リサイクル施設でリサイクルし、し尿汚泥は市内ではないが、県内の民間リサイクル施設でリサイクルしている状況である。
齋藤優子会長	仙台は学都仙台ともいうが転入者が多い。仕事の関係で転入してきたり、海外からいらっしゃる方も多い。そういった転入者への啓発も根気強くやっていく必要があると思う。転入してきたときにどのように周知、啓発ができるかということを重点的に考えてもらいたい。
齋藤優子会長	それでは、続いて議事（2）について事務局より説明をお願いします。
資源循環企画課長	<資料 2 に基づき説明>
齋藤優子会長	ただいまの事務局の説明について、質問や意見を承りたいと思う。
齋藤和平委員	最終目標は令和 12 年度としているが、5 年先の目標値が、今の状態であれば簡単に達成できそうな項目がある一方、例えば、家庭ごみに占める資源物の割合については、目標を達成するのが相当厳しいと思う。最終目標が達成できそうなものについては勇気を持って目標値を上げて、反対に、どう考えても達成が難しそうな目標は、目標値を下げることも必要かと思う。目標というのは達成することが一番大事なので、できないものを無理にということではなく、検討の余地があれば、目標値を変えることも

資源循環企画課長	考えてもらいたい。 最終目標を達成できそうな項目として、例えば、最終処分量や1日1人当たりの家庭ごみ排出量は中間目標を達成している状況である。そのほか、ごみ総量について、資料1-2の1ページに内訳を記載しているが、ごみ総量の中で特に減っているのは事業ごみである。事業ごみは令和元年度から2年度に大きく減っているが、おそらくコロナの影響で事業活動が停滞したためと思われる。その後、増減する形で推移している。事業ごみは社会経済情勢にかなり左右されるところがあり、見通しが立てづらい。ごみ総量33万トンという目標は、平成23年度からの10年間の計画における当初の目標だったが、東日本大震災が発生し、目標の33万トンから上振れし、達成が難しくなったことから目標を修正したという経緯がある。現時点では、まずは前期間での計画の目標である33万トンの確実な達成に向けて、引き続き取り組みを進めていきたいと考えている。また、最終目標の達成が明らかに難しそうな項目については現実的な数字に目標を修正するということもあり得るかと思う。8月にお示しできるよう、引き続き検討していきたい。
佐藤由麻委員	家庭ごみに占める資源物の割合の目標値について、達成できなくても仕方がないという理由等があるのであれば、目標値を見直すこともあり得ると思うが、この目標は資源物の量ではなく、家庭ごみに占める資源物の割合なので、資源物として分別されれば限りなくゼロに近づけるはずのものだと思う。そのため、目標値を緩める方に見直すかどうかは慎重に検討すべきであるし、混入の割合が減らない理由がなぜかということ进行分析した上で、本当にやむを得ないのかどうかを慎重に検討すべきだと思う。合理的な理由がないのであれば、目標を緩めるというよりは、目標値は維持したままでそこに近づけるための具体的な方策を検討して計画に盛り込んでいくというのが本来あるべき姿だと考える。
資源循環企画課長	家庭ごみに占める資源物の割合は、当初計画を策定したときには、40数%であったところを、中間目標で35%、最終目標で30%と設定したものである。この目標は現計画で初めて設定した目標で、少し挑戦的な数値であったかとも思っている。家庭ごみも事業ごみと同様にかなり量が減っており、資源物の混入割合を計算する際の分母になる家庭ごみ量が減っていることから、分子となる資源物の分別をより徹底しなければならないということもあり、苦戦しているという状況もある。さらに、紙類、プラスチック類、布類の順に混入割合が高いという状況で、特に紙類に関しては、雑誌、新聞、段ボールは定日収集等もあり、ある程度分別されているが、雑がみと言われる菓子の紙箱やメモ用紙などが混入している状況である。分別すれば資源として分けられる手段も整えているものであり、目標

齋藤優子会長	の達成に向けてより一層取り組んでいかなければならないと思っている。目標値の修正については、その根拠も含めて検討したい。 資源物の混入割合に関しては、分母となる家庭ごみ量に対する要因や、分子となる資源物に対する要因、製品プラスチックの話もあったが、資源そのものの定義づけなど様々な要因があると思う。考えられる要因を評価の中に書き出しをするとまた見えてくるものもあると思うので、資料に残してもらえると良いと思う。
沼沢委員	混入している資源物としては、雑がみが一番多いが、雑がみの中でもどういうものが多いのかを分析してみると良いと思う。雑がみという言葉が抽象的すぎて、雑がみが何かよく分からないまま、とりあえず家庭ごみに捨てるということに繋がっているような気がする。雑がみが混入する割合を低くしようと言うだけではなく、雑がみの中でもこの種類のものが多い、というようなことを示せば効果が出るのではないか。雑がみの混入はずっと続いているので、抜本的に深く突っ込んだ取り組みをしてもらいたい。
資源循環企画課長	改めて雑がみについて例示をすると、菓子を包む紙箱、メモ帳、トイレットペーパーの芯、カレンダー、封筒などがある。封筒など、あて先で個人名が入っているものだと、その部分だけ切り取って分別するのではなく、そのまますべて家庭ごみに捨てるという家庭も多い印象である。 雑がみと一括りで言ってしまうと、イメージが湧きづらく、どう分別したらいいのか分からず、適切な排出行動に繋がりにくくなるということもあると思う。周知啓発する際は、例示をするなど工夫を考えていきたい。
資源循環部長	リサイクルルートが分かりやすい新聞紙や折り込みチラシ等は再生後の製品を示しながら周知啓発しているところである。例えば、紙パックや段ボールも具体的なイメージがしやすく、各家庭でも分けやすい。一方、封筒の切れ端やはがきなどは、まとめてリサイクルをしているため、雑がみという言い方をしてきた。ご指摘のとおり、雑がみが何を指すのか分かりづらいために分別が進まないということも考えられるため、広報の仕方を工夫していきたい。市民の皆様が認識しやすく、集めやすく、出しやすくなる仕組みを考えていきたい。
志田原委員	資料2の5ページ、新たな視点の追加についてとあるが、これまでも給食の残りの堆肥化などで事業者や大学等と連携を図ったり、資源を循環させるような取り組みをしていると思う。それらとここに書かれている新たな視点というのは違うものか。

資源循環企画課長	これまで資源循環という視点で、ごみ処理の視点からの議論が中心であったところ、資源を循環させるために、リサイクルした先での使用側や製造側といった視点が今の計画では不足しているのではないかと考えている。例えば、リサイクルした先の製造側でのニーズをくみ取り、そこに向けたリサイクルという視点、プラスチックであれば再生材を使った製品が新たに出てきているという報道等もあることから、そういった取り組みの強化などが考えられる。
齋藤優子会長	サーキュラーエコノミーの話に関連して、これまで関わりが薄かった動脈側の事業者等も組み込んで、サーキュラーエコノミーを地域全体として推進していく必要があるということは、国家戦略として、第5次循環型社会形成推進基本計画に書かれている。それを進めるために、民間の事業者が自主的に行っていることも含めて連携が進んでいくよう、地域全体でのアクションの効果が見える化できるような仕組みが良いと思う。民間事業者の取り組みに関するデータ連携についても検討してほしい。
齋藤優子会長	それでは、続いて議事（3）について事務局より説明をお願いします。
資源循環企画課長	<資料3に基づき説明>
齋藤優子会長	ただいまの事務局の説明について、質問や意見を承りたいと思う。
遠藤副会長	資料3の5ページ、もったいないマルシェの登録人数、事業者の登録数、また、実際にどのくらい買い物がされているのか教えてほしい。
家庭ごみ減量課長	資料1-2の10ページにあるが、令和7年3月末時点で登録店舗数は39店舗、市内利用者登録は約1万人となっている。令和4年10月からサービスを開始し、登録者数は順調に増えている。登録店舗については、新規登録があったり、閉店があったりで、大体40店舗で推移しているところである。食品ロス削減量は、令和4年度から令和5年度は若干増加したが、令和6年度は減少した。これは、事業者において計画的に製造、販売、仕入れ等を行ったことも影響していると考えている。取引件数は、令和6年度は1,407件となっている。
遠藤副会長	食品ロス削減量は令和5年度から令和6年度にかけては半減しているということだが、事業者にアンケート等をして、システムの改善点などを聞いてみてもいいかと思う。
家庭ごみ減量課長	今後、事業者へヒアリング等を行い、状況等の把握を行いたいと考えている。

齋藤優子会長	資料3の6ページ、リチウムイオン電池の回収について、4月15日に国から各自治体に通知が出されており、今後、全国的に強化されていくことになると思う。今年度の取り組みの中に、分別体験講座と書かれているが、これはどういう内容のものか。
家庭ごみ減量課長	分別体験講座は、環境事業所の職員が訪問し、地域の方に実際に、リチウムイオン電池も含め、紙類やプラスチックなどの分別の体験をしてもらうものである。
齋藤優子会長	この講座は今までも行っていたのか。また、自治会等で申し込みをすれば良いのか。
家庭ごみ減量課長	これまでも実施していたものであり、申し込みについてもその通りである。
齋藤優子会長	続いて報告（1）について事務局より説明をお願いします。
家庭ごみ減量課長	<資料4に基づき説明>
齋藤優子会長	ただいまの事務局の説明について、質問や意見を承りたいと思う。
高橋たくみ委員	資料4の4ページ、検討の視点に、仙台の強みを活かし時代に即した理解の深化、という記載があるが、仙台の強みが何なのかが資料からは分からなかった。また、5ページに、仙台らしい環境学習・啓発拠点に必要なスペースや機能を検討、とあるが具体的なイメージが分からなかったので教えてほしい。
環境共生課長	4ページの仙台の強みについては、豊かな自然環境や生物多様性、市民協働で環境を改善してきたこれまでの取り組みなどを活かして理解を深めてもらいたいと考えている。また、仙台らしさについては、現在はハード面に関して検討を進めている段階であるが、仙台らしさを打ち出すために、例えば、特徴的な建物を建てるという方法や中身で勝負するという方法があると思う。中身の見せ方ということであれば、こういうところを充実させるとより見せる幅が広がるとか、今後、他都市の事例を情報収集するにあたって参考になりそうなイメージなどがあれば、ご意見やアドバイスをいただきたいと考えている。
高橋たくみ議員	今のような説明を資料にも書いてもらえると良いと思う。 最新の清掃工場は、デジタル化はもちろんだが、エネルギーをあまり使わずに燃やし続けるという機能を持っているものもある。また、学習スベ

藤田環境省東北地方環境事務所次長 (中島委員代理)	ースということに関しては、例えば、AR でごみの流れの映像を見せるなど新しい技術がある。そういった他都市の先進事例を学ぶのはもちろん、国内に限らず、海外の取り組みも参考にすると良いと思う。
環境共生課長	主に言葉の使い方についてのコメントになるが、今後は3Rより広い概念であるサーキュラーエコノミーや、脱炭素も含めた概念である持続可能な社会とか、そういった言葉がより使われるようになっていくと思う。古くからある3Rという言葉にあまりこだわらずに検討した方が良い。また、国連で定められたSDGsが2030年までであり、以降はまた新しい言葉が出てくると予想される。これまでの歴史でいうと、2015年までがMDGs、その次がSDGs、そしてまた次の言葉が出てくる。それに対応できるようにということも意識すると良いのではないかな。さらに、この場だけでなく、仙台市の別の審議会などでも検討すると良いと思う。
齋藤優子会長	3Rをサーキュラーエコノミーにする、SDGsのその後を見据えるということについては配慮しながら進めたい。当計画については、まずは次の5年間で検討していくことを想定しているため、その時点でわかる言葉遣いは改めた上で、実際に稼働をするときには、その時点での状況を反映させたい。 検討の場については、仙台市環境審議会でも同内容についてご意見をいただいている。資源循環に関わる内容があったことから、資源循環の視点からご意見をいただきたいと考えたこと、また、設置場所が清掃工場の敷地の一部であるということから、廃棄物対策審議会でも報告したものである。
大原委員	資料4の5ページに「時代に即した」と書かれているが、サーキュラーエコノミーやカーボンニュートラルの言葉の使い方というよりは、時代に即して、資源循環をどう捉えていくのかということだと思う。環境分野に限らず、経済や観光などの部署と連携するということも考えられると思う。そういったところも検討してもらいたい。
家庭ごみ減量課長	先日、知人の20歳代のカップルが広島に旅行に行くと話しており、環境に関する仕事をしているわけでもないのに、清掃工場を見にいくと言っていた。広島の清掃工場を調べてみたところ、本当に美しく、近未来的な清掃工場で、観光先として成り立っているということに驚いた。仙台らしさということであれば、仙台に行ったらここに行きたいと思ってもらえるような場所にできたら良いと思っている。
家庭ごみ減量課長	今紹介いただいた広島の清掃工場も含め、他都市でも先進的なことをしているところがあると思うので、参考にしていきたい。

沼沢委員	環境学習こそ、子供たちにしっかりと学んでもらえる場所を作ることが必要だと思う。例えば、子供たちにどんなことを学んでほしいのかとか、バスの動線、お弁当を食べる場所などを考えてほしい。こういった施設を一番使うのは小学校高学年くらいかと思うが、その時に、ごみの分別に興味を持ってもらうことが大切だと思う。近未来的なものや、技術的なものも良いと思うが、まずは、子供たちにどういうものを見て、何を知ってもらいたいのか、そのための環境として何を準備しなければならないのかを、小学校の先生方に話を聞くなどして、現実的な上滑りしないものを作ってもらいたい。
伊藤委員	本校でも総合的な学習の時間に環境学習に取り組んでいる。5年生が泉ヶ岳に野外活動に行き、川の水質調査を行い、そこから本校の学区にある梅田川に派生して、自分たちの身近な川の環境にフォーカスするという流れになっている。その中で、自分たちのごみのポイ捨てが実は泉ヶ岳の環境に影響しているということを学ぶ課程がある。さらに、出前事業として、南極観測隊に来てもらったり、キリバスの環境問題をやっている方に来てもらったりすると、自分たちの行動が仙台市の自然にもつながるし、世界の環境問題にもつながっていくということを子供たちが学ぶ。そうすると自分がどう行動したらいいのかを学ぶことになる。そこが一番大事で、知識だけを得るのではなく、自分たちに何ができるかを学ぶことが一番の勉強だと思っている。そのためのスペースになればいいと思う。仙台市として一生懸命取り組んでいることを子供たちに伝えたいし、毎年課題や取り組みも変わってくるので、その内容が柔軟に変えられる仕組みであればいいと思う。また、バスに乗って出かける機会が非常に限られているため、出前授業に来てもらうことが多い。例えば、食品ロスについて企業の方に来てもらうこともあるが、その情報のプラットフォームとしての役割もあるとより良いと思う。
家庭ごみ減量課長	子供たちに学んでもらうというのは大事なことでと考えている。イベントや葛岡のリサイクルプラザで3Rの学習展示もしているが、子供たちが家に持ち帰り、家族で話し合って、リサイクルについて考えてもらうことは非常に重要だと思っているので、取り入れていきたい。また、仙台市だけでなく、世界の環境問題について考えるきっかけづくりができればと思っている。食品ロスの削減について、本市でも出前講座も行っているが、子供たちと直接触れ合いながら、どういうことに興味を持っているのかなどを知ることができ、啓発の仕方などを考えるきっかけにもなっている。プラットフォームというお話もあったが、そういったところについても検討していきたい。
齋藤優子会長	今泉清掃工場に隣接するということも加味して検討を進めてほしい。

	質問がないので以上で終了する。審議の円滑な運営にご協力いただき感謝する。 以上
--	---